

小説部門

応募総数 241 作品

【選考経過】

一次選考通過…………… 89 作品



二次選考通過…………… 13 作品



最終選考候補…………… 5 作品



【総評】

秋津 透

今年、最終選考に残った五つの候補作は、傾向の違いはあれ、いずれも「この話を書きたい！」という強い意志と熱意が感じられた。私は、創作の源は何より先に意志と熱意だと信じているので、非常に喜ばしく思っている。もっとも、その意志と熱意を、いかにして読者に的確な形で伝えるかという技術については、勢いのある分、粗削りな作品が多かった。更に工夫と精進が必要だと思うが、今回は書き手の年齢が総じて若く、中には十代の人もある。技術は時間をかければ磨くことができるので、将来の進歩が大いに期待できる。当初の意志と熱意を忘れることなく、切磋琢磨して頑張ってもらいたい。

久美沙織

昨年の『赤城山卓球』の野村さんの印象があまりに強烈だったため、五編全部見劣りがしてしまった。この比較は今年に限ることではないと思う。これから応募される予定のかたがたは「『赤城越え』できなければ大賞にはならない」と肝に銘じていただきたい。応募者の年齢が若返ったのは喜ばしいが、世界や他者への敬意の不在に肌寒いものを覚えた。選に漏れた二作には特にこの傾向が強かった。ようするに「若いから何をしても許されると思っている」ように見えて損をしている。気をつけて欲しい。

中村うさぎ

ファンタジーは「往きて還りし物語」である、と言われる。主人公が何かを求めて旅立ち、そして何かを得て帰ってくる話。「何か」とは宝物であったり魔物の首であったりするワケだが、それはあくまでシンボルに過ぎず、結局は「俺は何のために生まれてきたのか」「私は何のために生きているのか」という問いの答を探す物語なのだ、と、私は思っている。シリアスであろうとギャグであろうと、そこには人間が描かれ、人の魂の旅が綴られていなければならない。冒険も試練も戦いも、すべては「何のために」という答を見つけるために用意されているのである。最終選考に残った五作品には、それが描かれていたのだろうか。答は結果を見ていただきたい。

優秀賞

『この時代に生きることを』

坂本和也

(さかもとかずや)

Profile

プロフィール

広島県東広島市在住。現在、フリーター。ゲーム会社への就職を準備している中、応募作を書き上げた。

受賞の言葉

一番うれしいことは、僕の書いたものを高く評価してもらえたことです。正直、この世界で結果を出すことは、無理だと思いはじめていたところでした。本当に、いま僕は喜びの中にいます。いろんな人、ありがとう。

作品紹介

「そして、こう思ったんだ。ああ、俺はこの世に男として生まれて来て、一生この拳で戦うことなく死んでいくのかなあってね」……。妙な名字と物事を深く悩まない以外は人と変わることのない高校2年生、「骨竜七郎」は、ある日ひょんなことからとんでもない「ゲーム」——刃物と銃器以外ならなにを使用してもかまわない対戦格闘トーナメント——に参加することになった。なぜ、戦うのか、なぜ、やめないのか、自分でも確かな答えを持たないままに骨竜は常識からは逸脱した「ゲーム」を続けていく。だが、ライバル、とも言える相手たちとの出会いと、彼らに対する勝利を経て、骨竜は次第に自分自身がなにを求めているのか、なにを探しているのか、をおぼろげながらにつかみはじめる。そしてやがて、そんな「祭」の日々にも終わりが——すなわち「ゲーム」の決勝戦の日がやってくる……。 「ゲーム」の果てに、骨竜が見いだしたものは……？

【選評】

秋津 透

総評に述べた「強い意志と熱意は感じられるが、粗削りなので、技術を磨いてほしい」という言葉は、この作品に最もあてはまる。ふざけているのか真面目なのか判然としない主人公に、私は不思議なほど強い存在感を覚えたが、共感できない読者もいると思う。感性の違う読者をも、物語に巻き込んでいく技術があれば、この作品は更に光るだろう。なお、誤字脱字、変換ミス、言い回しの間違いなどが多く目についたので、注意してほしい。

久美沙織

日本語になっていない部分が多々ある。死語『ナウイ』で現したくなるような独特の空気感や、飄々とした骨竜のキャラはなかなか魅力的。「へんな能力」を発揮する「ゲーム」とやらがつまらない、そこ抜きで「フツーそうでフツーじゃない日常」だけを描いてくれればよかったのに、と言ったら秋津さんにそれは違うと言われたのだが。対戦の部分、そもそも小説というメディアにむいていないとわたしは思う。マンガかゲームに移植したほうがもっとおもしろいのでは？

中村うさぎ

五作品の中で、もっともテーマの伝わってくる作品であった。「人は何のために戦うのか」という問いは、「人は何のために生きるのか」という問いと、結局は同じことなのである。だらだらと続く日常、勉強にも部活にも不真面目で、ひたすら無表情に無感覚にトボケたギャグばかり飛ばして生きている主人公。彼が格闘ゲームに求めた答は、まさに「俺は何のために生きてるのか」であった。ふざけながらも真摯な姿勢を貫いた点を評価したい。

佳作 『カレディナ・プラウスキュル』

朝倉 衛
(あさくらまもる)

Profile
プロフィール

愛知県豊橋市在住。現在、フリーター。
第3回えんため大賞では二次選考まで通過。

受賞の言葉

不完全な作品ではありますが、それでも推して下さる方がいたというのは素直に励みになります。良い部分は失わないよう、受けた指摘を心にとめて努力していきたいと思えます。ありがとうございました。

作品紹介

「僕には、なんにもないんです。僕はほかの人とぜんぜん違うし、もう母もいないし……あの頃の続きで立派な人間になろうって頑張っているんだけど」……。17世紀のシベリア地方をモデルとした、架空の世界・カレダ。主人公のラウルは、この土地に流れ着いてきた白人の少年である。彼は、ごく幼い頃からこの地で育ってきたため、原住民の一員として人生を全うしようと考えていた。だがあるとき、村のシャーマンが悪しきものの到来を告げ、ラウルは村のために「精霊の使命」を担うことを決意する。時を同じくしてラウルと同じ白人の一団が船でやってくる。彼らを率いるシャプラント王国の王子・ウィルが狙うものとは……？ そしてラウルは悪しき流れをくい止めることができるのか？

【選評】

秋津 透

文章表現力は、候補作の中でもずば抜けて高い。しかし、力を籠めて構築された物語世界に比べ、肝心の登場人物が弱い。構成も、健闘は認めるが、凝りすぎてわかりにくい。もっと、いい意味で力を抜いた作品が見たいと思った。

久美沙織

文体にはオーソドックスの強みがあり、ところどころのセリフが実に巧みで「うまい！」と唸られるところもあった。が、凝った構成が読みにくさを増すばかり。主人公側のみを、この五倍丹念に描写したほうがいい。

中村うさぎ

五作品の中で、文章力、表現力ともに卓越した作品であった。極北の民族の文化などの描写もきっちりと書き込まれていて作者の実力を感じた。ただ、惜しむらくは、主人公の苦悩や葛藤がいまいち伝わってこないことだ。

佳作 『白詰草の香り』

清藤コタツ
(きよふじこたつ)

Profile
プロフィール

福岡県北九州市在住。現在、無職。小説を書き上げたのも応募するのも初めて。

受賞の言葉

初めて小説というものを書いて、佳作をいただいたことに自分でも正直戸惑っています。何よりも結果が残せたことで、今後の活動に自信が持てるようになりました。

作品紹介

「私が存在を許される場所はもうここにしかないけれど、周りの人達の優しさがあるからここにいられます」……。『終戦』から6年。この国にもようやく復興の気運が高まり、国土開発と工業化が進展していたが、「妖」が棲む飛岬島には、穏やかなゆっくりとした時間が、いまだ流れていた。この島に住む郵便配達青年・塚崎亮は、島の奥にある屋敷に荷を届けに行った際、その屋敷に隠れ住む少女・沖田一葉と出会い、一目惚れする。向日葵色の髪に空色の瞳を持つ一葉は、いまだ世間に残る外国人に対する敵愾心や偏見を避けるため、屋敷から出ずに暮らしているらしいのだが、じつは、昏く哀しい理由が彼女を閉じこめているのであった……。

【選評】

秋津 透

老人、女性、猫や小妖の描写に、ほのぼのとした妙味がある。反面、惨劇のシーンなどは、必要なので仕方なく書いているような印象を受ける。書きたいものだけで話を構成した方が、より実力が発揮できるかもしれない。

久美沙織

「妖」、「見る人」「聴く人」などの設定が空回り。だが猫の名前の由来のところなどに「きゅん」と直撃されてしまった。この等身大テキストに感応する人間にとっては貴重な傑作。わたしはこれに一等賞をつけました。

中村うさぎ

描きたいテーマや世界観はわかるし、うまくまとまっているが、主人公、ヒロイン、脇役キャラたちが、それぞれ平板な印象を受ける。「ただのいい人」「ただの健気な少女」では、人の闇を食う魔物の凄味も際立たない。

コミック部門

選考委員 [呉 智英、永井 豪]

応募総数 **349** 作品

「月刊コミックビーム」マンガ大賞
 250 作品

「月刊ファミ通ブロス」マンガ大賞
 99 作品



【選考経過】

コミック部門の最終選考候補は
 「月刊コミックビーム」「月刊ファミ通ブロス」
 両誌のマンガ大賞入賞者がノミネートされます。



最終選考候補 12 作品

【総評】

呉 智英

応募作品はバラエティに富んでいたもので、面白く読ませていただきました。ただ、今回の受賞作品は、「アゴリンピック」を除けば、ただ雑誌に載せればOKというわけでもなく、かなりの工夫が必要に思える。編集者の腕の見せ所といえるでしょうね。

永井 豪

今回は全体的に突出した作品は見受けられなかった。特に主題を消化し切れてない作品が多く、それらを除くと受賞した4作品が残った……という感じですね。次回はもっと作品の描くべきテーマをしっかりと絞り込んで挑戦してきて欲しい。受賞作の中では特に「アゴリンピック」のみずたさんのパワーに期待したいですね。

新井創士 (月刊ファミ通ブロス編集長)

普段は「ファミ通ブロス的な作品」を中心に見ているので、コミックビームへ応募された作品を見るのは新鮮でした。今回、「受賞、即デビュー!」という作品はありませんでしたが、佳作は4作品が選ばれました。なかでも「アゴリンピック」は、うっとうしいのに気に入ってしまいました。

奥村勝彦 (月刊コミックビーム編集長)

応募された作品に統一感が無く、極端な個性が感じられ面白かった。たしかに載せにくい側面はあるけど、載せちゃうよ! 『ビーム』だしな。次回も期待してますんで滅茶苦茶な作品も大歓迎したいと思います。

佳作 『oto chan』 (全16頁)

さかいわたる

Profile
プロフィール

京都府在住。

受賞の言葉

選考委員の方々および両親・友人・先生に感謝しつつ、これからさらに精進していきたいと思いました。

作品紹介

小学生のオトちゃんは、相棒のイヌをひきつれ、バスに乗り込む。降りしきる雨の中、バスは海へ海賊船へ！

【選評】

呉 智英

雑誌に載った時に、この人の作風は意外と目立つように思う。まだまだ伸びる余地を感じるし、是非そうなってもらいたい。

永井 豪

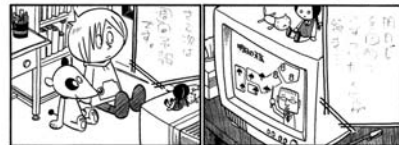
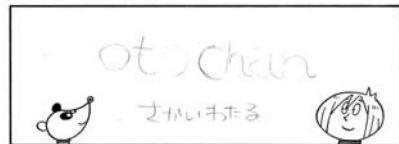
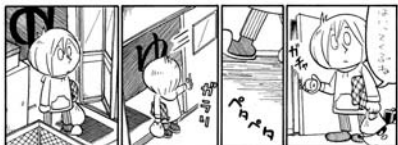
絵柄や話は一見稚拙に見えるけれど、業界のインパクト重視という流れに逆らうというのは、かなり面白いアプローチなのではないか？ ……と思います。

新井 創士

子供の頃を振り返らせるような、日常と幻想を織り交ぜた作品だが、構成が今ひとつ。レトロな絵柄と主人公のさめた表情が、独特の味になっている。

奥村 勝彦

のほほんとした味がある。好きだなあ、俺。演出の仕方次第では結構、ユニークな存在になるんじゃないか。健闘を祈る。



月刊コミックビーム掲載決定！

佳作 『二十六人の男と一人の少女』

※ゴリキー原作 (全32頁)

田邊 剛
(たなべつよし)

Profile
プロフィール

東京都在住。

受賞の言葉

御疲れ様です。初めまして。有り難うございます。お願いします。

作品紹介

二十六人の男たちは、黙々と工場で作パンを作りつづける日々。彼らの唯一の安らぎは、いつもやってくる可憐な少女。そんな時、ある男がやってきて……。

【選評】

呉 智英

個人的には大変好きな作品だが、作者の将来を考えると、このまま作風が固まらないように願いたい。

永井 豪

マイナーな感是否めないが、引き籠もり等の現代的な主題を過去の文芸作品に求めた意欲を買いたい。

新井 創士

原作を読んでいないのだが、完成度は高いと思う。ただ、作品の娯楽性や時代性を考えると、読者や掲載する本をかなり限定する作品だ。

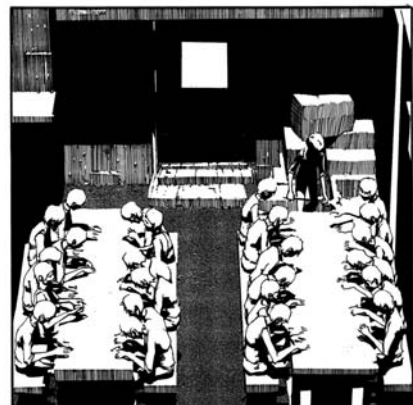
奥村 勝彦

ゴリキー？ 郷力也なら知ってるぞ。絵がめちゃくちゃ上手いんだけど、漫画にその絵が馴染んでないような気がするな。



二十六人の男と一人の少女

ゴリキー作 田邊剛



月刊コミックビーム掲載決定！

佳作 『ファンタジー・ファン』 (全14頁)

マナベ ウミ Profile
プロフィール

宮崎県出身、東京都在住。

受賞の言葉 ありがとうございます。ちょうど、東京に引っ越したところで、これを機会にもっと頑張りたいと思っております。

作品紹介

森の中に住む少女と男が、幻想的な出来事が次々起こるなかで結ばれていく……。

【選評】

呉 智英

ますむらひろし的な世界を頑張って表現している。ただ、労力があまりに掛かりすぎているので、商業誌で連載を持ったときに、果たして耐え切れるのかどうか。あと、ペンネームは是非御一考を。

永井 豪

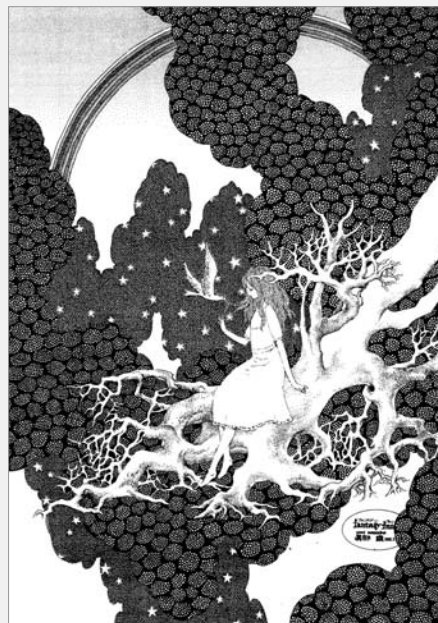
絵と構図は完璧。幻想的な世界観もよく表現されているけれど、かなり掲載される雑誌を選ぶような間口の狭さを感じられる。

新井 創士

点描中心の独特の絵柄が魅力。だが、逆にこのタッチで「漫画」を描くのは難しい。漫画を描きたいのか、イラストをメインにするのか、今後の課題だ。

奥村勝彦

カケアミと点描の嵐に驚く。そんなに細かい作業が好きか？ 印刷されたらほとんどツブれるぞ。それから、作者の視力と手首が心配だ。



月刊コミックビーム掲載決定！

佳作 『アゴリンピック』 (全32頁)

みずたまさやす Profile
プロフィール

千葉県在住。

受賞の言葉 漫画は難しいものだと深く感じるこの頃です。ありがとうございました。

作品紹介

立花君はアゴが異常に尖った中学生。ある日、彼は謎の集団に誘拐され、世界最強のアゴを決定する『アゴリンピック』に無理やり出場させられる。

【選評】

呉 智英

もともとかなりな水準の能力は持っているし、もう少しコンパクトにまとめる構成力がつければ、商業的に化ける可能性を感じる。

永井 豪

パワーなら今回の中では随一。アゴだけで32ページを描き切った点を評価したい。こういった馬鹿馬鹿しい作品は大好きだし、次回作が楽しみです。

新井 創士

若干冗長で、もっと「濃く」詰め込んでほしかったが、ひと目見ただけで感じるパワーあふれた作品。作者が何を描きたいのかがしっかり伝わってくる。

奥村勝彦

バカ漫画の本道。あんまり余計な事を考えすぎないで、バカ漫画の道をつっ走ってもらいたい。バカはいいぞ。



月刊コミックビーム掲載決定！

イラスト部門

応募総数 **773**人

2,150作品

【選考経過】

一次選考通過……………246人



二次選考通過……………46人



最終選考候補……………19人



【総評】

大槍葦人

「美少女」がテーマということだったのですが、やはり作品全体的に要素を詰め込みすぎの感がありました。何かを強調したいとき（この場合は美少女ですが）は、あえてその他の要素をばっさり切り捨て、トーンを抑える、ということが大事だと思います。脇役が脇役らしいほど主役は光るものだと思うので。もちろんいろんな方法論があっているのですが、基本的なレベルで、まだ「作品」の作り方に稚拙なものを感じることが多かったです。

木村明広

今回の選考は去年とは違った意味で難しい選考でした。最大のポイントでもありネックにもなったのは「美少女」というテーマ。このテーマが存在する限り、この枠を外しているものを頭に据える事はできない……しかし、今回の応募は明らかにその枠を狙ったものが少なかった。今までのえんため大賞のイメージがそうさせたのでしょうか。そういう事もあって今回は「テストの結果は満点なのに名前が書いてないから0点」的なものが多かった。テーマがなかったらもっと違う結果になっていたでしょうね。実力のあるものもあったのですが……残念です。

幡池裕行

今回は「美少女」というテーマに沿った作品自体が少なく、またそのテーマのなかで遊びきった作品がありませんでした。美少女と言っても、単にカワイイキャラクターを描けば評価されるわけではありません。物語と組み合わせる時に、いかに魅力を発揮するか。そういう視点で描かれたものが、佳作の2作を除いて見受けられなかったのは残念なところです。選考委員と言えるのは、この美少女（キャラクター）、萌え（シチュエーション、世界観）の双方から歩み寄って欲しいということ。さらに書店に自分の絵が並んだ時にいかに読者の目にとまるか、隣に並んだ同傾向のカバーと差別化しうるのか。次回はこんな気持ちで、テーマに対して気概を持って望んで欲しいところです。

優秀賞 『シャッターチャンス』

G 3
(ジースリー)

Profile
プロフィール

山形県在住。ゲーム会社や雑誌への投稿、コミケで作品集を出したりしながら、独学でプロのイラストレーターを目指してきました。現在は雑誌のイラストカットなどをフリーで描いています。

受賞の言葉

今まで何度か雑誌などに投稿してきましたが、これほど大きな賞を戴いた事がなかったので大変光栄に思います。ありがとうございました。



【選評】

大槍葦人

「美少女」というテーマに最も近いコンセプトだな、と思いました。画面の作り方も、女の子をより魅力的に見せる上手さがあります。ただ、やはり雰囲気押し切るにはもう一歩弱く、技術で見せるにも説得力に欠けるところがありました。これからに期待です。

木村明広

色の選び方がうまい。絵として見ると言うよりは商品として見た場合という意味で。店頭でこれがあれば確実に目をひくビビットな色は、描くときは扱いが難しくセンスが問われます。馴染みやすい暖色系でまとめ、女の子の元気な動きと表情をうまく引き立てています。左手がちょっと短く見えるなど、デッサン系の問題を克服していけばさらに飛躍できるでしょう。大人の女性や老人など、描けるものの幅を広げる事も忘れずに。

幡池裕行

辛口な評価ですが大賞候補がないなか、選考委員一同熟考し選ばれたという幸運がG 3氏にはあります。テーマを明確にとらえ、単に媚びるのではなく、元気の良い少女を描いた点を評価しました。技術的にはほかの佳作の人に劣る面がありますが、それはマイナスではありません。将来のびていく可能性も魅力のひとつです。小説家やゲームディレクター等と組んだ時にどれだけ引き出しを持っているか、そんな可能性のあるアーティストたちが業界で生き残っていくのです。

佳作 『Jump-off』

御崎智敬
(みさきともたか)

Profile
プロフィール

東京都在住。第7回電撃イラスト大賞 銀賞。モンコレ・イラストレーターオーディション最終選考。

受賞の言葉 座右の銘は、あせらず、おこらず、あきらめずの平凡なイラストレーター志望の男です。ジャンルにとらわれず色々なものが描けるようになればと思います。今回佳作という評価を頂けて大変励みになりました。これからも日々精進をしていきたいです。

【選評】

大槍葦人

上手いです。プロでもなかなかこうは描けません。ですが、「上手い」という技術面での印象が強すぎる為か、女の子がどうこうとは思えないのです。「上手いなあ」で終わっちゃうんです。ぶっちゃけていうと画面に破綻が無さすぎて女の子に興味が無くなります。情報密度が女の子も背景も一緒で、全てにピンがあった写真を見ているみたいです。イラスト単体で女の子を描く場合は、多少崩れていても、雰囲気、オーラ、みたいなものを感じさせなければいけないと思っているので、評価を抑えさせていただきました。しかし技術面では文句なしに今回の応募作のなかで一番だったかと思います。

木村明広

今回のテーマでなければ頭を取っていたかもしれない作品です。背景の緻密さや空気感の表現は手慣れており経験豊富な感じを受けます。少女もあえて普通に描かず、背面落下の瞬間を描くという変化球的な構図。こういったコンテストの様なものに応募する時はえてして力が入り過ぎて、自分が最も得意なもので真めて面白味の無いものになりがち。こういったものがこういう場で描けるというのは凄いです。ただしモノクロの作品が普通過ぎて残念。

幡池裕行

今回の応募作の中で抜群の画力を評価します。ああ、この数ミリの描線は計算して入れているな、とわかってしまうようなレベルです。しかしその一見隙のない旨さは同業者の絵描きを刺激しますが、ともしれば技術の袋小路に陥りかねません。世の中をみれば何にせよ、人は決して存在の完成度に魅かれるのではなく、見えざる魅力に引き込まれるのです。編集者、読者の目線をお忘れないうえにほしいところです。



佳作 『大切な風景』

浅井あきひろ
(あさいあきひろ)

Profile
プロフィール

出身地は岩手県二戸市で、岩手県立盛岡農業高等学校を卒業しました。現在は宮城県仙台市でフリーターをしながらイラストレーターをめざして作品を描いています。

受賞の言葉 CGで絵を描くようになってから三年ぐらいが経ちました。主に描く題材は現代の風景で、自分なりの世界観を感じてもらえるような絵を目指して日々絵を描いています。

【選評】

大槍葦人

画面の密度感があって目にとまりました。横顔に独特の癖があり、画面の構成の仕方も独特です。ただ、独特であればいいというものでもなく、いろんな課題点があるように思えます。最たるものは女の顔そのもので、画面の背景とあまりにもなじみすぎてしまっていて、「美少女」であるところの「周りから浮いた感じ」があまり感じ取れません。すこし、ドライに画面を捉えずぎていて、絵の奥にある執念のようなものが見えればもっと良かったのかなと思います。しかし、この若さでここまで描けるというのは単純にうらやましい。

木村明広

背景を描くのが好き！ な感じが伝わって来る作品ですね。色の使い方が作品によってうまく統一してあり、その絵の中の気温……感情を見るものを感じさせます。ただもっと丁寧に描く事はできません。線がよれているとかは絵柄として受け入れられますが、建物のパースや遠近法の処理などは無意識に見る者に違和感を感じさせます。練習すれば直るものですから意識して描きましょう。勉強も絵も基本が大事です！(BY茶宝先生)

幡池裕行

おそらくテーマを上手く生かし切れば今回優秀賞になった応募者です。キャラクター、世界ともに、魅力的な存在感を持っています。技術的には未熟ですが、その優れた色彩感覚、構成力がプロをも刺激します。編集者やほかの作家がいっしょに組んで仕事をしてみたい、と思わせる大事ななかをもっているのです。



選考委員特別賞 『白夜を渡る龍の船団』

鳥取砂丘
(とっとりさきゅう)

Profile
プロフィール

東京都在住。高校卒業後、ゲーム系専門学校のCG科に入学。専門学校卒業後、バイト生活をしつつ現在にいたる。

受賞の言葉

今回の意外な入賞は本当に嬉しく、胸高鳴る次第なのですが、これに甘んじることなく、日々精進でゆこうと思います。今後ともよろしくお願いします。あと、入賞記念にX-box買います(笑)。



【選評】

大槍葦人

独特のものがあるな、という点で評価があったようです。僕自身には絶対描けない絵で、あまり評価のしようがないのですが、面白い、この世界観をもう少し見てみたいな、という魅力がありました。

木村明広

選考において、今回のテーマの影響をもっとも受けた作品です。あまりにもテーマから懸け離れていたのですが、選考委員のツボを突き、特別賞となりました。テーマが「萌え」だったら選考委員的にはある意味萌えだったのですが……でもこういうセンスは貴重です。突っ走っちゃって下さい。

幡池裕行

最初は選外だった作品です。しかしその魅力ある世界観は選考委員というよりイラストレーターとして評価したい。「テーマに沿わせる」という意味では失格ですが、えんため大賞の可能性を狭めないという視点で強く推しました。

東放学園特別賞 『永久駆動パペットショウ』(小説)

※本賞は、東放学園専門学校の在校生・卒業生の応募作品の中からもっとも優れた作品に与えられるものです。

豊倉真幸
(とよくらまゆき)

Profile
プロフィール

中学生の頃に萩原規子さんの作品「空色勾玉」に出会い、小説家を目指す。高校卒業後、東放学園専門学校デジタル文芸科に入学し本格的に創作に取り組む。

受賞の言葉

この作品は、長い時間をかけて書いてきた愛着のあるものなので、認められてうれしい気持ちでいっぱいです。まだまだ勉強不足ですが、身近な題材から一步一步がんばります。

【選評】

笠原次郎 (エンターブレインえんため大賞事務局長)

人の悪しき心に取り憑き魂を食らう「妖紅の魔術師」そして、それを滅するためにやってきた謎の青年「七祠」。ストーリー、アイデアは月並みではあるが、短いセンテンスの簡潔な文章で描かれる、主人公・茜音の生き生きとした描写は魅力的。物語世界の奥行きが足りないなどまだまだ稚拙な点もあるが、今後の可能性を感じさせる作品。